恋人以上で特別な――

seafield

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋人以上で特別な――

【Ｎコード】
Ｎ００７５Ｚ

【作者名】
ｓｅａｆｉｅｌｄ

【あらすじ】
花火大会に行くこととなった幼馴染であるコウと楓、二人の友人である伸二と真奈実。
会場にて、真奈実が気を利かせてコウと楓を二人きりにさせる。
何となく気まずい雰囲気の中で……

（前書き）

結構前にこのサイトで投稿していたものを、少しリメイクしたものです。

「コウくーん。朝ですよー。雲一つない青空が眩しいくらいに輝いてますよー。実際は太陽が眩しいんだけどねー。アハハハ」
「……何をしているんだ楓（かえで）」
寝起き一番に発した言葉は、「おはよう」という挨拶なんかではなく、ツッコミだった。
あぁ。慣れとは恐ろしいものだな。
鍵を閉めておいたはずの部屋に不法侵入している女の子がいるというのに、驚かなくなるとは。
「あ、やっと起きたよー。ホラ！」
楓は手を俺に差し伸ばす。満面の笑顔で。

楓――早川（はやかわ）楓。

幼稚園からの付き合いで、まあ俗に言う幼馴染ってやつだ。
……正確には幼馴染ではないのだが。
俺は楓の手を取らずに再び楓に背を向けて寝入る。
「あー、こら！　もう、コウくん起きてよー」
楓は俺の肩を揺さぶるが、俺は狸寝入りに努めた。
「はあ。もうしょうがないなー」
と、背中に感じる楓との距離が近くなった。
何をするつもりだ？
フニュ。
「！」
突如、肩に何かが触れた。
柔らかい、が確かにある感触……
「起きないと、コウくんの唇奪っちゃうぞ」
「なっ……！」

耳元で囁かれた甘い言葉にぞくっと来た俺は慌てて布団を捲り上げて起き上がる。
「あはっ。ざーんねん」
「残念じゃねえよ！　いつも性質（たち）の悪い冗談はやめろって言ってんだろ！」
「コウくん、顔赤いよ？」
「う、うるせー！」
「それに大丈夫！　冗談じゃないから」
「尚、悪いわ！」
まったくこいつってヤツは……
整った顔立ちに、こげ茶色のロングヘアー。
容姿は長い付き合いの俺から見てもかわいいと思えるというのに……性格がコレだもんな。
もう少し、思春期の女の子らしく恥じらいという感情を持って欲しい。
いや、さっきのは不覚にもドキッとしてしまったが。
「ほーら！　早く着替えて学校行こ？」
机の上に置いてある時計を見ると、七時半を少し回った辺り。最終登校時間は八時であり、それ以降に学校に行くと遅刻扱いとなってしまう。
ここから俺らの通う高校までは、約十分。
確かにそろそろ起きないとマズイか。
俺は楓に言われたから、ではなく単純に遅刻しないためにベッドから下りた。
……楓に言われたからじゃないからな。
「やーっと起きてくれたよー。って、ちょ、ちょっとタンマ！」
「何？」
俺がパジャマの上を脱ぎかけた所で、楓から「待った」がかかる。
「着替えるなら私が出て行ってからにしてよ、バカ！」
楓はそれだけ言い残すと、部屋を出ていった。

その顔が赤くなっていたように見えたのは、気のせいだよな？
うん。気のせい気のせい……
俺は余計なことは考えずに、さっさと着替えてしまうことにした。
というか、キスしようとしておきながら、男の着替えを見るのはアウトなのか。
……女心はよくわからん。

部屋を出ると、玄関に俯いた楓が立ち尽くしていた。
俺は玄関に用があるため、自然と楓の元に近寄る形になる。
「コ、コウくん」
「ん？」
ローファーを履いていると、横から声がかかった。
「今度から着替える時は言ってね。流石にコウくんといえど、着がえてる所はちょっと……」
楓は何故かそわそわしながら恥ずかしがっている。
何でそわそわしてんだ楓のやつ……お前がそんなんじゃ、調子狂うじゃないか。
「あ、あぁ」
俺は楓の要求を承諾する。
「それじゃ気を取り直して……行こっか！」
楓は自分にも俺にも言い聞かせるように言った後、ドアを開いた。
差し込んでくる光が、今日も暑そうだなということを予感させた。

八月十日。
世間一般でいう夏休みだ。そんな夏休みであるのにも関わらず、俺らが学校に行く理由など一つしかない。
……地獄の赤点補修だ。

ちなみに楓はこんな性格の癖に頭脳明晰であり、赤点なんてもってのほかである。
それなのに、どういうわけかこいつは俺の補修に付き合っているのだ。
何だか少し申し訳ない。
「おーふたりさーん！」
楓と並んで歩道を歩いていると、背後から声がかかった。
「あ、真奈実（まなみ）ー！　それに伸二（しんじ）くんも！　おはよー」
「よーす」
俺と楓は対照的なトーンで二人に声をかける。
「相変わらず仲が良いわねー」
そんな俺らを真奈実はニヤニヤしながら見ている。
「まあねー」「いやいや」
楓と俺は、お互いの正反対の回答に顔を見合わせる。
「え？　だって仲はいいよ？」
「あのな、楓。こういう時は『そんなことないよー』って返すもんだろ」
「うーん。よくわかんないや」
「……まぁいいか」
楓の性格だから仕方ない、と俺は小さく苦笑する。
ま、その純粋さ、というか天然（？）なところが楓のいいところなんだけど。
「流石楓ね。期待を裏切らない子だわ」
真奈実は楓を背中からぎゅーと抱きしめた。
「ちょ、ちょっと真奈実ー」
「いいじゃんいいじゃん。ふわー。楓の匂いがするー」
「あ、ちょっと、そ、そこはっ……あ、やん！」
「うわっ。凄く柔らかーい」
「だ、駄目まな……んっ」
お二人さんは女の世界というものに入ってしまわれたようだ。

「朝から暑苦しいよな、真奈実のやつ」
伸二が妹である真奈実の行動を見て、呆れたようにつぶやく。
いや、これを見ての感想がそれですか伸二さん。
「何か言った？　馬鹿伸二」
「何もいってねえよ」
今更だが、伸二と真奈実は幼馴染である。
「嘘。絶対何か私の悪口言ってた」
「だから言ってねえと何回言ったら気が……」
「ま、まあまあまあまあ」
既に日常茶飯事となりつつある痴話喧嘩に楓が割って入る。
二人の喧嘩は楓の仲裁により、楓に甘い伸二が先に折れて真奈実に謝るという形式で、いつも通り幕を閉じた。

「やっとおワターー！」
伸二が空に向かって伸びをする。
「ホント長かったー！」
「もう赤点とかいう制度なんか消えちゃえばいいのに」
「全くもって同感」
一週間にも渡る長い補修がやっと終了し、ようやく俺らは羽根を伸ばすことに成功した。
帰り道も不思議と足取りは軽い。みんなも同じなのだろう。今日は伸二のいつもなら白けるジョークでさえも笑ってしまった。
そうして歩いている内に伸二や真奈実と別れる交差点に辿り着いた。
「あ、そういえば！」
真奈実が別れる直前、何かを思い出したように声を上げた。

「今日、仙龍川で花火大会の日じゃん！　みんなで見に行こうよ」
「うん！」
楓が一際大きい声で真奈実に頷く。その目は、小さい子供が欲しいものを買ってもらった時のものに似ていた。
……楓は覚えているのだろうか。あの日の約束を。
「今日の夜の七時半からなんだけど、いいよね？」
「コウくん行こうよ！」
楓が俺の手をブンブン振り回す。
……楓が約束を覚えているのかどうかはわからないが、こんなにも楓がはしゃいでいるのだ。
断れるわけ、ないよな。
「いいんじゃないか？」
「オッケー。ならここの交差点に七時集合ってことで！」
真奈実の提案に頷き、俺たちは一度解散した。

空を見上げれば、先程までの青空が嘘だったかのように、黒に覆われていた。
黒い色紙にラメをばら撒いたかのように、白や赤や青色の星が夜空を彩っている。今日の月は綺麗な上弦だった。
「コウ」
「おう。伸二か。真奈実は？」
「先に待ち合わせ場所行ってろってメールきた」
伸二は肩をすくめてメールの本文を俺に見せる。
六時くらいに真奈実が楓を呼び出していたため、今楓は真奈実の家にいる。

しかし何やってんだろう。もうすぐ七時になるっていうのに……
時計の長針が十二を指した所で、俺らは二人を呼びに行こうと家に行こうとした。
「お待たせー！」
「やっと来たか」
俺は軽く毒づき、後ろを振り返る。
「……」「おお」
俺は二人を見て某然とした。隣の伸二はワザとらしく感嘆を上げた。
「どうよ？」
真奈実が誇らしげに胸を張る。
「ええーと、その子誰？」
「もう！　何言ってんのよコウ。楓に決まってんじゃない」
そうだよな。そうに決まってるよな。
だが……
浴衣姿の楓は、まるで別人のようだった。
焦げ茶色の長髪は後ろで団子のように纏められ、少し化粧もしているのか何だか雰囲気がガラッと変わっていた。いつもの小動物のような無邪気さと打って変わって、今の楓からは大人っぽさを感じる。

金魚の絵柄の浴衣に身を纏った楓は……
「どうかな？　私の浴衣姿……」
それはもう悔しいくらいに似合っていた。
「コウ。何か言ってあげなさいよ」
俺は真奈実に促されてようやく俺が黙りこくっていたことに気付く。

「あ、ええーと、いいんじゃないか？　似合ってると……思うぞ」
「ホントに？」
言った瞬間、俺は恥ずかしくなって楓から目を逸らした。楓の嬉しそうな顔が瞳に焼き付いている。

やべえ、楓のやつ……すごくかわいい……

俺は一目惚れした男の気持ちを味わったような気がしたが、すぐにその邪な気持ちを追い払う。
駄目だぞコウ……俺と楓は――――
「うん。早川さん似合ってるよ」
「ありがとう伸二くん」
伸二はいたってクールに楓の浴衣姿を褒める。
「ちょっと、私は？」
誰からも何も言われなかった真奈実が不満を垂らした。
「ん？　あぁ、似合ってる似合ってる」
「何よ、その適当な感じはー！？」
真奈実は伸二に飛び掛かる、が。
「おわっと。ははは。浴衣だから早く走れまい」
浴衣が足に引っ掛かって真奈実は逃げた伸二を追うことができない。伸二はそれを良いことに真奈実の悪口を安全な場所から浴びせている。
「くそ、この馬鹿伸二……後で覚えておきなさい」
真奈実の背後からは不可視の怒りのオーラが放たれていた。いや、見えないのだから実際は「感じられた」の方が正しいのだが。
こりゃ、帰ったら伸二死亡だな。
俺は楓の方を見ると、目があった。そして、そんな二人を見て同時に笑った。

七時半になっても、花火は打ち上げられることがなかった。
先程放送で、三十分遅れての打ち上げとなるらしい。理由はよく聞こえなかったが。
「……」
俺と楓の二人は、並んで花火が打ち上げられるのをじっと待っていた。
真奈実が気を利かせてくれたのはいいが（ちなみに伸二は先程鳩尾に真奈実の蹴りが入り、トイレに籠っている。それをさすがにやりすぎたと思ったのか、真奈実がトイレの前で伸二が復活するのを待っている）、何だか気まずい。
いや、そう思ってるのは俺だけか。……あれ？　俺って楓といつもどんな話してたっけ？
「……コウくん」
「え？」
俺が悶々としていると、楓が俺の手を握ってきた。
「約束、覚えてる？」
約束……
そうか。楓のやつ、覚えてたんだな。
「覚えてるよ」
俺は楓に事実を伝える。
「本当？　それじゃあ……」
「でも、その約束は守れない」
だが、俺は楓との約束を守れない。いや、守ることが出来ないのだ。
『もしも私が結婚できる歳になって、その年の花火大会の日までコ

ウくんのことを好きであり続けたら、私を恋人としてみてくれる？』

三年前の花火大会の日に結んだ、その約束を。

「どうして……？　約束したのに……ずっとずっと、この時を待ってたのに！！」

「ゴメン……」

俺はただ俯いて謝ることしかできない。

「どうして……どうして、約束、守れないの？」

楓の目には感情の粒が溜まっていた。

「俺らは幼馴染なんだから……恋人とは違うんだ」

俺は楓に嘘をつく。

「そんなの……そんなの関係ないよ！　幼馴染だからって……そんなの、理由になってないよ……！」

楓は嗚咽を噛み殺しながら、俺の不条理さを嘆いた。

そうだ。確かに関係ない。

でも、そう思わないと駄目なんだ。

楓とだけは、恋人になっちゃいけないんだよ……！

「……やっぱりコウくんは、私のこと何とも思ってないんだ……だから私となんか付き合いたくないから、それで……」

「違うっ！」

「違わない！　それしか、コウくんが私と付き合えない理由が見つからないもの！　私がまだまだ子供で、今朝みたいなバカなことをやる面倒くさいやつだから、コウくんは――！」

「俺だって付き合いてえよ！」

「え？」

例え楓自身が言ったとしても、俺の好きな人を貶（けな）すのは許さない。

つい頭にかっと血が上った俺は、楓の言葉を遮り、反射的に叫んでしまっていた。

「だったら、どうしてっ？」

ここまできたら、もう後戻りは出来ないな。

俺は今までずっと楓に黙っていたことがある。

それは、楓がもしその事を聞いたら、ショックを受けると思ったからだ。二度と楓の笑顔が見れなくなる……

そんなこと、俺は絶対にさせたくなかった。

そして……俺が知ってしまったこの事実を俺自身が認めたくなかったからだ。

自分の口で言ってしまったら、俺は認めたくない事実を認めたことになる。

それが嫌だったのだ。

「楓……落ち着いて聞いてくれ」

だが、遂に言う時が来てしまった。

いずれは楓に言わなければならない。そんなことはわかっていた。

わかっていたけれど……やはり辛いものがある。

「コウくん……？」

楓の心配そうな声が聞こえる。

「あのな、俺らは幼馴染だ」

「うん」

楓は今更何を、とでも言いたげな顔をした。

「んでな……幼馴染であると同時に」

俺はきつく唇を噛み締めた。

「俺らは兄妹なんだよ……！」

「……え？」

楓の動きがピタリと止まる。

「母親違いの兄妹……つまり、異母兄妹なんだ。俺たちは」

「う……そ」
楓は口に手を当てて目を見開く。
「本当なんだ」
俺は楓に頷き、あの日――三年前の花火大会の日についての説明を施した。

……
……

花火大会が終了し、その日の夜中、俺は花火の熱が下がっていなくて目が冴えていた。
中々寝付けなくて、何度も何度も寝返りを繰り返している内に、トイレに行きたくなった。

トイレで用を足して、自分の部屋に戻ろうとした時。
俺はリビングの明かりが点いているのに気付いた。
親が電気点けっぱなしで寝たのかと思い、俺は確認しにいった。
リビングには、二人の人影があった。中学一年だった俺は、何となく身を隠しながらドアに近付くと、楓の母さんと俺の母さんが話していた。
ドアが半開きだったため、中の会話が聞き取れる。
俺は耳を済ますと……

話の内容に唖然とした。

「二人は血の繋がった兄妹。もしも二人が付き合うということになったら、どうするの？」
楓の母さんの会話の意味が初めは理解出来なかった。

「でも、可哀想じゃない」
「それはそうよ。でも、そうやって伝えるの躊躇していたって、いつかは話さなくちゃいけない。二人はもう中学生よ？　この時期に言わなかったら、もっと話すのが辛くなる」

だが、次第に二人が話している内容を理解してしまう。

ギィ――。
「え？」
俺はリビングのドアを開いた。
「コ、コウ？　まさか、今の話を……」
母さんが俺の登場にたじろぐ。俺はそんなことお構いなしに二人に尋ねた。

「俺と楓がきょうだいって本当ですか？」

……
……

「そしてその後、詳しく教えてもらった。俺と楓は生まれた順で俺が兄となること。親父の不倫相手が楓の母親であること……何故かその時の俺は酷く冷静でな。喚きもしなければ、怒りもしなかった。ただ、冷静に事実を受け止めていた」
まあ、それは事実を認めていただけで、心の内では適応規制が働いて、理解できていなかったからなのだけど。
「楓……」
「どうして、そんな大切なこと、早く教えてくれなかったの？」

そうだよな。そう思うよな。

俺は楓にどんな事を言われても構わなかった。

それで、楓の心の負荷が少しでも軽減されるなら……

「別にいいじゃん」

「え？」

俺は楓の目を疑った。

「もう、コウくん水臭いよー」

「え？　……え――――！」

楓の口調はやけに明るかった。

何で？　どうして？

何で楓は笑ってられるんだ？

「どうして……？」

俺は尋ねないではいられなかった。

「どうしてって、何でそんなこと聞くの？」

「だって俺らは兄妹なんだぞ？　だから、恋人になんかなれないのに……」

「いいよ」

「は？」

俺は楓が不思議でたまらなかった。

「何で？　自分で言うのは何だけど、楓は俺と付き合いたかったんじゃないのか？」

それなのに、どうして……楓はそんなに嬉しそうなんだ？

「恋人にはなれなくても、いいの。だって……」

楓は自分の胸に手を当てて、ゆっくりと目を瞑る。

「私の中には、コウくんと同じ血が流れてる」

心臓がドクンと一際大きく鼓動した。
今、俺の中には楓と同じ血が流れている……
「私はね、他の人にはないような、コウくんとの特別な繋がりが欲しかったの」
特別な繋がり……
それが付き合うことだったのか。
「でもね、血が繋がってる……それだけで凄く特別。それどころか、恋人以上の繋がりだよ」
楓は今までにないくらい、飛びっきりの笑顔を見せた。
はは。ホント楓には敵わないな。
俺は苦笑ではなく、心から笑った。
そんな考え方したことなかったな。
俺は三年前、その事実を知った時。楓には言わないでおこうと心に決めた。
それは、自分のためであり、楓のためでもあると思い込んでいたからだ。
でも……それは俺の自惚れに過ぎなかった。
楓は俺が思っていた以上に、いい性格をしていた。
「はは。そうだよな。血が繋がってるなんて、恋人以上の関係だよな」
「うん！」
楓は笑ってうなずくと……
「うわっ」
俺の懐に飛び込んできた。楓の腕が俺の背中にまわされる。
「か、楓……俺らは……」
「兄妹だって、抱きしめあったりはするでしょう？」

俺の言葉を遮って、楓は俺が言おうとしたことを挑発的に否定する。
「まあ、そうだな……」
俺は楓につられるように、楓の背中に腕を回した。
ヒュ――――――ン。パアン！
俺が抱きしめるのと同時に、遅延していた花火が始まった。
「きれー」
楓と共に見上げた空には、色とりどりの火の花が咲き誇っていた。

#

「朝だよー。起きてー」
「……何してるんだ楓？」
「何って、起こしに来たんだよー」
「そうか……おはよう楓」
「おはよう！　……お兄ちゃん」

～fin～

（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございました！

感想、指摘など書いていただけたら凄く嬉しいです＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0075z/

恋人以上で特別な――

2011年11月30日17時56分発行